

前回までのあらすじ

〈BO作戦〉タイムリミットの制限時間が迫る中、ツバキ・タカチホは友人の流遠るとおやみひめを救うため、たちばな橘アサトから〈ヤミヒメ〉の操縦を引き継いだアヤカ・シユバイツァーと共闘し、超

巨大機獣〈ルイン〉内部への侵入に成功する。

ツバキによって〈ルイン〉のコアへ侵入を果たしたやみひめは、奪われた自身の身体からだを
探す途中、気になるものを発見する。それは〈ルイン〉の記憶装置メモリで、遠い昔の惑星ゼ
ナに生きるひとりの少女の記憶でもあった。

ハイデマリー・I・エイミス。

〈異能者〉という望まざる才能を与えられ、それ故の欠落ゆえを抱えた、普通の少女。

やみひめはハイデマリーとして、当時の彼女の記憶を追体験する。それは本来、普通に
幸せになれないはずの人間が、皮肉にも普通でない状況のために存在を必要とされ、しか
し悲しい結末を迎える物語だった。

無事、〈ルイン〉のコアから身体を取り戻し帰還したやみひめを、ツバキは万感の思いで
迎える。

その時、ある種の『波動』が放射された。

そして世界が——あか紅く染まった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

遠い昔、何処かの国——

『ソレ』は生まれながらに、強い自我と高い知能を持っていた。

この星は未知の敵から攻撃を受けており、滅亡の危機に瀕していた人間は起死回生を願っている。『ソレ』を含む特殊な出自の機獣すら決戦兵器として利用しようとしていた。

(あまりに愚かな選択だ)

並みの機獣が制御可能となった事で、人間はこの星の覇者となったつもりだろうが、そんなものは驕りにすぎない。彼等の言葉を借りるなら『井の中の蛙』そのもの。知らないのだ、制御など出来ない、絶対的な上位者の存在を。

「昔はこんな奴等が普通にそこらを闊歩してたと思うと、ゾツとするな」

「そうかい？ 浪漫があつていいじゃないか」

人間が二人。科学者らしく、よくこの場に来ては雑談めいた会話をしながら、次の素体の選定をし、また去っていく。

『四番』を使うって事は、いよいよ人類もヤバいのかねえ……」

「発見された始祖の中で、もっとも凶暴だつて話だ。頼もしいじゃないか」

二人は『ソレ』の隣で鎮座する機獣の様子を確認し、いつも通り去っていった。

どうやら隣——『四番』が次の決戦兵器の素体に選ばれたらしい。

人間は自ら滅びに向かって踏み出したのだ。

だが、それを警告する義務も義理も、『ソレ』は持ち合わせていなかった。

斯くして——『四番』は暴走した。

当然だ。制御など出来るはずがないのだから。

これまでの素体は人間に対し友好的、そうでなくとも敵意はなかった。

だが、『四番』は違う。

その本質は『邪』であり、自分以外のすべてを拒絶する。

その破壊速度は本来の敵の比ではなく、すでに人間の滅亡は秒読み段階に入っていた。

(どうでもいい事だ)

そう。『ソレ』にとってはどうでもよかった。人間に敵意はないが、好意もないのだから。

(人間が滅びれば、少しはこの星も静かになるだろう)

『ソレ』にとって人間とは、その程度の存在だった。未知の敵に滅ぼされようが、自業自得で滅びようが、知った事ではない。

「——やあ、調子はどうだい？」

いつもの人間——いや、今日は一人しかいない。

しかも、普段は片方の言葉に相槌あいつちを打つだけで能動的な会話はせず、保管たもされている素体に話しかけたりもしない。

「私の言葉を理解しているのだろうか？ いつも私とキースの会話を聞いては、愚かだと馬鹿ばかにしていた。違うかな？ ああ、ちなみに彼は殉職じゆんしよくした。もう来ない」

片方の人間はキースという名で、死んだらしい。悲しんでいる様子がないところを見ると、特に親しい間柄でもなかったのだろう。

この人間は『ソレ』が自我を持ち、自分達の会話を理解し、どういった感情を抱いていたか気付いていた。それを今になって明かす意図はなんだ？

『四番』を使えばこうなると君は知っていた。私もそれを感じたが、上の決定には逆らえない。君の声を聞いたなんて言っても、正気を疑われるだけなのは目に見えていたからね。下手をすれば更迭こうていだ。しよせん私も、替えはいくらでも利くのだ」

男はそう言って判りやすく肩すくを竦めたが、言葉に自嘲的な響きは感じられなかった。

いつもそうだ。キースとの雑談でも、彼の言葉は何処どこか他人事たにじのようだった。

（——用件は？）

ほんの少しだけ男に興味わが湧いた。だから気まぐれたまに訊ねた。

「人類を救ってほしい」

どういった理屈かは不明だが、本当に『ソレ』の思考が読めるらしい。男は一切の動揺も見せず、大真面目にそう言った。

「これまでは頼む必要がなかった。『四番』に限っては、頼むだけ無駄だったからだけどね」

これまでに素体として選ばれた者達の本質にまで、男は気付いていたらしい。そして、『四番』が制御など出来ない事を理解しつつ、それでも何も言わず、この惨状を引き起こした。彼の言っている事は判る。人間とは理不尽な存在だ。どうしようもない事が多々あるのだろう。

（——）

『ソレ』は初めて、人間を愚かではなく、哀れに感じた。



わずか数日で、その日は訪れた。『四番』による被害は凄まじく、これ以上の猶予はなかった。準備が完璧に整うまで待つて、護るべき人間がいなくなつては本末転倒なのだから。

『ソレ』は戦つた。

万全とはいかないまでも、目的を果たせるだけの備えを用意して。

強制的に成長を促進させた一体の自分の複製体と、火力増強のための増幅器。それらを駆使し、『ソレ』はほぼ相打ちという形で『四番』を機能停止に追い込んだ。

後の事は判らない。生き残つた人間がどうなったのか、『ソレ』に知る術はなかつた。



『四番』同様、『ソレ』も破壊されてはおらず、機能停止によつて永い眠りに就いていた。

金属生命体の自己修復は眠りによつて効果が促進されるため、コアの判断により強制休眠状態へと移行していたのだ。それだけ受けたダメージが大きかつたとも言える。

(あの男はどうなつただろう——?)

定期的に眠りが浅くなり、意識が上層に浮上する。微睡の中、ふと浮かんだのは『ソレ』に救いを求めたあの男だつた。彼には情熱がなく、自分の命にも然して執着がなかつた。だが、生まれたばかりの赤子——妹夫婦の子供だつたか——を抱いた時、初めて命の尊さを感じたらしい。

(……………考えても詮無き事か——)

あの状況で人間に明るい未来が待っているとは思えない。生まれた赤子が幸せになれるとも。ならばいつそ、『四番』の暴走で滅んだ方がマシだつたのではないか。

(それこそ今更か)

意識が再び沈んでいく。

機獣も夢を見る。

『ソレ』が見た夢は、あの男が幼い子供を抱えて、満足そうに誰かと笑いあつている姿だつた。隣の女性が妻なら、抱いているのは自分の子だろう。普通に連れ合いを持ち、普通に子を成し、普通に死んでいく。平凡だが、普通の人間としての幸せを得られた彼を、『ソレ』は内心で祝福した。

ただの夢だと判つていても。



夢を見る。微睡まじろみの中でぼんやりと何かを考える。

どれだけ繰り返しただろうか。

どれだけの時間が流れたのだろうか。

人間は、世界は、今も存続しているのだろうか。

話がしたい。

あの男との対話で、人間を知ってしまった。相互理解の難しさと楽しさを知ってしまった。

誰でもいい。誰かいないのか。

(……………?)

光が差した。

しばらくふりに見る光だ。

どうやら『ソレ』は地中に埋まっていたらしい。

世界は今も存続し、空は相変わらず青いままだった。



この時代の人間によって、仇敵である『四番』と共に発掘された『ソレ』は、また同じ場所に保管されていた。それはつまり、あの戦いの後、当時の人間に回収するだけの力が残されていなかった事を意味する。機能停止状態とはいえ、破壊された訳ではない強力な決戦兵器を二体も、そのまま放置するなどありえないだろう。

(手遅れだったという事か……)

推測になるが、『四番』によって多大な被害を受けた人間は、あのまま衰退し滅んだのだ。

この時に抱いた感情が『後悔』なのか、それとも『怒り』や『悲しみ』と呼ばれるものなのか、『ソレ』はずっと考えていた。いつまでも意識が表層に浮かんだまま、人間で言えは『眠れない』状態が続いていた。

「——やあ。初めましてだね、古代種君くん」

この場所に運ばれて十数時間後、『ソレ』に話しかける者が現れた。幼い——少女と呼ばれる年頃の人間だ。

彼女の名はハイデマリー。

科学者らしく、発掘され、この場に運ばれた『ソレ』と『四番』に並々ならぬ興味を抱いていた。

『古代種』——か

この時代の人間からすれば妥当な呼び名だろう。

(……あの男も、初めて話しかけてきた際、このような調子だったな)

『ソレ』の知る限り、機獣に話しかける人間など滅多にいない。きつと目の前の少女も相
当な変わり者に違いない。



『ソレ』が目覚めた世界は様変わりしていたが、その時代に生きる人間の在り方は何も変わっていないかった。

「君が話せたらいいのにな……」

「ボクはこんなだから、友人が出来なくてね。カスミ君くらいだよ、同年代でまともにボクと付き合ってくれたのは」

「人類滅亡の危機に対し不謹慎なのは承知しているが、ボクは今の方が幸せだよ」

ハイデマリーは毎夜、『ソレ』に会いに来ては胸の内を明かした。

彼女が抱えている『痛み』——それは『欠落』と表現した方が正しいかもしれない。

常人が持たないものを持って生まれたばかりに、普通は持っているはずのものを持ち合わせない。だから才能を持つ者は、才能を活かして生きていくしかない。それはある種の『呪い』だが、凡人は才能を持つ者を妬む。普通である事の尊さを、普通であるが故に
気付けない。

やはり人間は、愚かで、哀れで、だからこそ——



『ソレ』とハイデマリーの逢瀬は続いた。彼女はあの男のように『ソレ』の思考を読み取

るような事は出来ず、一方的に語りかけるのみだったが、『ソレ』に不満はなかった。あるとすれば不安だ。日に日にハイデマリーの様子がおかしくなり、情緒が不安定になっていった。最初は無自覚だったが、やがて本人も自分の言動が異常である事に気付き始めた。

「——そうだ。いつまでも『古代種君』というのもなんだし、名前を付けようじゃないか。〈コノハナノサクヤヒメ〉！ どうだい、神々しいだろうか？ ……いや、普段呼ぶには長い。ならば〈サクヤヒメ〉だ！ これ以上はまからんぞ」

「聞いてくれたまえよ、〈サクヤヒメ〉。〈オーガノイド・システム〉による効果は絶大だ。これで追加の開発予算が確保出来た。君のおかげだ。目の前に凶器を持った殺人鬼が迫っていれば、人道主義など何の役にも立たない。それをようやく現場を知らないお偉方も理解したと見える」

「……なあ、〈サクヤヒメ〉。このところ、周囲の視線がおかしいんだ。元々、腫れ物に触るような雰囲気はあったが、怖がられているというか、異常なものを見るような目でボクを遠巻きにするんだよ。そういうえば、カシミ君ともしばらく話をしていない気がするな…」

「怖いんだ……最近はずぐに眠くなったり、記憶が曖昧な時間が増えていてね……何時に起きたとか、何を食べたとか、今日は何をしたとか、ほとんど覚えていないんだよ…
…ねえ、さく……ん？ なんだったかな、君の名前は……さく……さくや……さくら……？
ふふ。そう、〈サククラ〉だったね。良い名前だ。——誰が付けてくれたんだい？」

ある種の『回線』を開き、違う時代、あるいは別の世界から、無意識に知識を得られる代償。

〈異能者〉に待つ廃人の未来が、ハイデマリーに近づきつつあった。



終わりの時が来た。

〈サクヤヒメ〉の名を与えられた『ソレ』の前に、嚴重に封印されていたはずの『四番』

が立っている。

その身にハイデマリーを取り込んで――

彼女が〈異能者〉である事は気付いていた。だが、『四番』が『回線』チャンネルを利用してハイデマリーを操るなど想定外だ。そんな苦当は〈サクヤヒメ〉にも出来ない。規格外な存在だと知ってはいたが、よもやここまでとは……。

『四番』によって壊滅した研究施設ラボの彼方あちこちから炎が上がり、夜の闇を煌々こうこうと照らす。

〈サクヤヒメ〉はハイデマリーを取り戻すため、『四番』に挑んだ。

勝率はほぼゼロ。前回の戦闘では準備を整えた上でようやく相打ちに持ち込んだのだ。勝てる見込みのない、自らの無意味な行為に、〈サクヤヒメ〉はしかし何の疑問も抱かなかった。出来るか出来ないかではなく、やるしかないのだと。

『四番』の機体各部から放たれるレーザーの雨を掻い潜り、背後に回り込んで跳躍ジャンプ。弱点である背中インテークファンの吸入口に右腕の鉋ハサミを突き立てる直前、左からの衝撃に視界が右にスライドし、全身を地面に打ちつけた。『四番』の長く強靱な尾おに迎撃されたのだ。完全に読まれていた。

『四番』の視線が此方こちらに向く。嗤わらっている。目の奥まがまがに禍々まがまがしい光を宿し、〈サクヤヒメ〉を嘲笑あざわらっている。

――怖かろう？ 悔しかろう？

何かはじが弾けるような感覚。それが『怒り』だと理解する前に、もう飛びかかっていた。平らな機体かしだをより低くし、『四番』の右足を渾身こんしんの力で払う。高い重心あだが仇となり、姿勢を崩し――たりはしなかった。即座に尾で地面を打ち、その反動で転倒まぬがを免れた『四番』は口を大きく開き、最強の武器である荷電粒子砲を放った。

事実上、これを防ぐ手段はない。

だが、その最強の武器は〈サクヤヒメ〉にもある。大きく湾曲して前方を向いた尾の先から荷電粒子砲を放ち、相殺そうざいさせる。ぶつかりあった高エネルギーが光と音に変換され、周囲を包む。視界が利かず、音も拾えないが、構ってられない。

まずは組み付いて動きを封じる。『四番』を相手に、離れては不利になる。そう思い距離を詰めるが、予測した位置に相手はいなかった。戸惑いも束の間つか、背中にいくつもの衝撃――ミサイルだ。〈サクヤヒメ〉の行動を予測し、あらかじめ発射しておいたのだろう。

（奴は狡猾こつかつで知恵が回る。だが、それは本能的なものであって、ここまで装備を使いこなす知性があったか……？）

可能性があるとするれば、内部に取り込んだハイデマリーの存在だ。『回線』を通じ、彼女が戦術を組み立てているとしたら——

(人間が搭乗してこそ、機獣は本来の性能を發揮する……こういう事か)

あの男の言葉を思い出す。

『機獣の性能に頼るだけではないけない。人機一体となつてこそ、機獣は最強の兵器となる』
たしかそんな事を言っていた。

——ギィシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……ッ!?

先ほどのミサイルの雨よりも強い衝撃に、〈サクヤヒメ〉は堪らず悲鳴を上げた。側面から現れた『四番』に、背中を踏みつけられていた。その巨体に見合った重量からの一撃は、並の機獣なら一瞬で碎け散る。だが〈サクヤヒメ〉はむしろ好機と判断し、『四番』の右足を左右の鋏で抱くように組み付いた。何度も何度も背中を足蹴にされるが、離さない。頭部のバルカン砲を至近距離から撃ち、撃ち尽くしたら牙で食らいつく。

(——返せ……返せ……ハイデマリーを……返せッ!!)

『四番』の右足の装甲に僅かな亀裂が生まれる。

直後、上からの衝撃が止み、下から掬い上げるような衝撃に変わった。『四番』に顎を蹴り上げられたのだ。空中に舞い、即座に巨大な爪を備えた腕に叩き落される。〈サクヤヒメ〉の頭部装甲は裂け、落下の衝撃で節足が数本へし折れた。

通常であれば機能停止を起こしても不思議ではない。そんな状態にも関わらず、〈サクヤヒメ〉は『四番』の動きを止めようと鋏を突き立てる——が、すでに攻撃するだけの臂力は残っておらず、ただ無意味に相手の足を掴んでいるだけだった。

(誰でもいい……ハイデマリーを……誰か……彼女を……救ってくれ——)

——『人類を救ってほしい』

やっと判った、あの時の男の気持ちだ。

気付くのが遅すぎたのだ。

あの男も、〈サクヤヒメ〉も。

愚かなのは人間だけではない。

機獣も、そして恐らくすべての生き物が、完全ではないが故に——



陽の光が届かない、格納庫のような無機質な地下空間。

今は人間の姿となり、安楽椅子アームチェアに深く腰掛け、地上の状況を窺うかがっていたサクヤヒメが、不意に上体を起こした。

「———っ!?!」

波動としか表現しようのない感覚があった。直後、閉じられていた記憶の扉が開き、過去から現在に至るまでの出来事を鮮明に思い出した。

その後、『四番』——ハメツノマジユウにトドメを刺される直前に世界改編が起きた。恐らくは内部に取り込まれたハイデマリーの意思が、『回線チャンネル』を通じなんらかの影響を及ぼしたのだ。理屈は不明だが、確信がある。聞こえたのだ、最後に、ハイデマリーの叫びが。

(記憶の違和感の正体も、これではっきりした。この時代は、何度も改変によって繰り返されておる)

機獣せんどうを煽動し、人間と戦った。その世界線に〈機獣少女〉など存在せず、アヤカ・シユバイツアーは〈ヤミヒメ〉の搭乗者だった。

表舞台には登場せず、黒幕に徹する事もあった。これはこれで愉快だった気もする。

〈機獣少女〉なるものが存在した世界線では、アヤカ・シユバイツアーは最初の一人——〈始まりの機獣少女〉と呼ばれていたらしいが、この世界線でサクヤヒメは何もしていない。ただ傍観していた。

〈カタストロ〉と呼ばれる異形を駆逐した後、人間同士で争う世界線もあった。

ちなみに、この時代は何度も改変によって繰り返されているが、サクヤヒメが人間の姿となったのはこれが初めてである。

(今回は今までと違うというのか——?)

腰掛けていた安楽椅子アームチェアから立ち上がる。乱れ、汗で張り付いた黒髪を払う。崩れた胸元を正し、ぞろっとした和装を整える。

(なんであれ、思い出したのだ——)

〈ハメツノマジユウ〉——かつて『四番』と呼ばれ、今は〈ルイン〉というコードネームで呼ばれている規格外の機獣。その中にハイデマリーが今も囚とらわれている。

だから——

第四十三話

神話の続き

流遠やみひめとツバキ・タカチホが〈ヘルイン〉の内部から脱出すると、世界が紅く染まっていた。まるで視界に紅いフィルターでもかかっているかのように。

「これって……」

「はい。あの時と同じです」

地球での最後の戦いにおいて、やみひめがクラウド・P・ブランから〈カタストロ〉を切り離れた時の事だ。〈分断するもの〉を発動した際、世界が今のように紅く染まった。それから件の〈カタストロ〉との対話と決着を経て、ツバキはその場に居合わせたフアフロウ姉妹と共に『門』で故郷・惑星ゼヘナに帰還した。

そしてこの現象が終わった時、世界改編が起こった。

ツバキと〈カタストロ〉による影響は消え、誰の記憶にも記録にも残ってはおらず、辻褄合わせによって、一連の事件による被害や怪我人は最初からなかった事になっていた。

例外は事件の中心にいたやみひめと橘アサト、後に記憶が戻ったクラウド、そしてゼヘナに帰還したためか影響を受けなかったツバキとMBデバイスの〈カグツチ〉のみである。

「やみひめさんが意識的にやった事ではないんですね？」

「うん。でも、多分、私がいま思っている……」

なんとなくだが、そんな気がする。更に言えば、未だ機獣としての〈ヤミヒメ〉が同じ世界に存在するにも関わらず、こうしてやみひめが存在を維持出来ている理由も、紅く染まった世界の影響なのだと判ってしまう。恐らく、ゼヘナのすべてがこうなっている訳ではなく、あくまで一定の範囲内でのみ起きている現象だ。つまり、その範囲を出るか、現象が収まってしまえば、またやみひめの存在は世界から排除される。

あまり猶予はないと思っておいた方がいいだろう。

「やみひめさん……?」

「ううん。なんでもないよ、ツバキ！」

心配をかけまいと笑顔を浮かべる。それで誤魔化せる相手ではないが、察して追及はしないでくれるのがツバキという少女だ。ひとつしか違わないが、年下というか、小学生とはやはり思えない。

「今はまず――」

「はい」

距離を取り、二階建てのアパート屋上から〈ヘルイン〉の巨体を同時に見上げる。改めて大きい。全長は百メートルを超えているはずだ

動きは緩慢だが、取り込んでいたやみひめを失っても未だ起動している。やみひめの

からだ
身体は動力源の補助的なものでしかなかったのか。それとも、まだ動けるだけのエネルギーが残っているだけなのか。後者であればエネルギー切れを待てばいいが、一時的に機能不全を起こしているだけなら、倒す機会は今を置いて他にない。

「やるんですね」

「うん。ハイデマリーを助けないと！」

〈ルイン〉のコアに潜もぐった際、取り込まれたハイデマリー・I・エイミスの記憶に触れた。

彼女が今、どういった状態なのかは不明だが、やみひめの力を使えばあるいは――

「っ?! ――〈防デフぐものレイド〉!」

咄とつ嗟さに発動の手順を省はぶいて防壁を展開した。直後、眩まはい輝ゆきが視界を覆い、防壁を衝撃が襲襲う。

(荷電粒子砲……?!)

高出力のエネルギーの奔流ほんりゅう。〈ルイン〉は未だ満足に動けず、クラウやルイゼが味方を誤射するとは思えない。ならば相手は恐らく――

「――つぐううう……!!」

やみひめの背中を護り、必殺を期した一撃を受け止めたのはツバキだ。上下の長さを切り詰めた弓のような得物えものを両手で握り、サソリの鉞ハサミのような凶器つばせと鏢つばせ迫り合いのような格好になっている。

「サクヤヒメ!」

ツバキに加勢ハサミし、鉞ハサミの持ち主の名前を叫んだ。古代種と呼ばれるサソリ型の機獣にして、今は人間の姿へと進化を果たした存在。〈ヒナミ総力戦〉におけるアヤカとの戦いで消息不明となっていたが、やはり健在だった。

「その名で呼ぶ際は最大限の敬意を払えと申したはずじゃがの」

平安貴族の十二単じゅうにひとえを思わせる、ぞろっとした和服を身に纏まとった妙齢の女性は、鉞ハサミを袖そでの内側に仕舞うと、静かな表情でそう言った。

肩かたをくすぐる艶つややかな黒髪。魅入られそうになる紅あかい瞳。〈ステインガー〉の化身たるサクヤヒメは、見た目には何も変わっていないはずだが、どこか雰囲気が以前と違っていた。

「……ハイデマリーさんの事、助けなくていいんですか!」

「……………。なるほどの、あの波動の影響か」

ツバキの言葉にサクヤヒメは僅わずかながら動揺を見せたが、すぐに得心がいったらしい。「波動って?」

「やみひめさんが〈ルイン〉のコアから出てきた時、そうとしか表現出来できない感覚があつ

たんです。私はその瞬間に、やみひめさんが見たのと同じものを視みました」

やみひめの問いに答えたツバキが言葉を続ける。

「サクヤヒメさんの雰囲気が変わっているように感じたので、ひよっとしてあの波動の影響を受けたのではないかと思ったのですが、正解だったようですね」

波動というのが何なのかも気になったが、それ以上にツバキの洞察力に感心した。

つまりサクヤヒメも少し前までハイデマリーの存在を忘れていた。あるいは、覚えていたが（ルイン）の中に囚とらわれている事までは判らなかった。そしてどちらであるにせよ、波動の影響で今は知っているという事か。

「だったら、ハイデマリーを助けようよ！ 私の力を使えば——」

「なにをもって救いとするっ？」

やみひめの言葉を遮さへぎり、サクヤヒメは続ける。

「良くも悪くも、変わり果てたこの時代にハイデマリーの知ち己きはおらん。解放されたとしても、ただでさえ孤独だったあの子には、さぞ過酷な未来が待っているであろうよ」

「それは……」

「だとしても、（ルイン）の中に囚とらわれ続ける事が幸せとは、私には思えません」

「そうかの？ 痛みや苦しみが無い分、眠り続けていた方がマシではないか？」

「そんな事ない！ ……と、思う。だって、私だって嫌な事はたくさんあるけど、それでも楽しい事だっていっぱいあるもん！」

「それは強者の意見じゃの。己うぬは弱者の——持たぬ者の立場で考えられておらぬ。それはすなわち、持つ者の驕おごりじゃ」

「——っ!？」

自分は普通だと思っていた。勉強も運動も人並みで、（機獣少女）になるまでは特別な才能もなかった。だが、ハイデマリーと比べてどうだ？ 友達がいて、好きな人がいて、学校だって普通に楽しい。普通である事が尊うやい事だと、彼女の記憶を見て感じた。普通に幸せな自分が、普通でないが故ゆえに普通の幸せを得られなかった少女に対し、ひどく無神経な発言をしているのではないか……。

「——それは詭弁きべんです！」

「ほう?？」

サクヤヒメは興味深そうに呟つぶやき、無言でツバキに続きを促うながす。

「貴女あなたの言っている事は正しいのかもしれませんが、私達の言い分だって間違っていない」

「ツバキ……?？」

「やみひめさん、サクヤヒメさんの言っているのも結局、彼女の考えでしかありません。ハイデマリーさんの幸せが何かは、ハイデマリーさん本人にしか判らないんです」

「……だから、私達も間違っていない——？」

正しくはないが間違ってもいい。それはそれで詭弁きへんというか、ただの言葉遊びな気もするが、人間のやる事に絶対がない以上、自分の考えで行動を選択するのは間違いではない。

そうだ。絶対的な正しさがない以上、間違っていないと思えるかどうかで判断するのも、やはり間違いではない。

「……ふん。平行線じゃの」

ツバキの結論に対し、つまらなそうにサクヤヒメは呟つぶやくと、後方のヘルインへ振り向く。

「行くがよい、へハメツノマジユウよ。どうすればよいか——判っておろう？」

その言葉を受け、力なく立ち尽くしていた超巨大な機獣が動き出した。やはり以前に比べ精彩を欠いてはいたが、それでも圧倒的な脅威である事に変わりはない。

「さあ、奴をどうにかしたいのであれば、まずは妾わらわを倒すことじゃ」

移動を開始したヘルインを背にし、やみひめとツバキに向け、サクヤヒメは挑発的な笑みを浮かべた。



ヘルインのいる中心部からは少し離れたビル街。

灰色の『骨』を思わせる装甲を纏まとった機獣との戦闘は未だ続いていた。前傾姿勢に巨大な頭部、そして地面と水平に伸びた尻尾しっぽ。それらの特徴は誰もが知る悪竜の王者・ティラノサウルス。しかもその全高は約十メートル、全長に至ってはその三倍はある。周囲のビル群に比べれば小さいが、生身の人間が対峙すれば絶望感ぜつぼうかんは半端ではない。

その場の誰も、世界が紅く染まった現象を気にしてられる余裕はなかった。

「——〈オーデイン〉！」

『了解。突撃形態』

ドレスに甲冑かっちゅうを組み合わせた姫騎士風のMBジャケットを纏まとったキリエ・ソウマが、馬上槍うまじやうを両手に構え突貫する。

速い。そして重い一撃を、しかしティラノ型は巨大な顎あごで受け止めた。剣豪の白刃取りのように。そのまま得物えものである〈オーデイン〉を奪おうとするが、キリエは愛機を離さ

ない。

「こんのおおお……!」

それどころか、力押しでじりじりと相手を押し込んでいく。圧倒的な重量の差があるはずなのに、恐るべき^{りよりよく}脅力だ。

「——っ!」

「でえええいッ!」

ゆつくりとだが後退するティラノ型を挟撃する二人の〈機獣少女〉。共にチャイナ服と呼ばれる共通意匠^{デザイン}のMBジャケットを身に纏^{まと}い、年上の少女は槍^{スピア}を、年下の少女は槌矛^{メイヌ}を構え、左右からキリエに加勢する。

リツ・ミナトとモカ・カワイ。

二人の攻撃はティラノ型の両の脇腹から伸びた副腕^{アーム}の先の爪^{ツメ}で受け止められたが、それは想定内だ。目的は敵の動きをこの場で止める事なのだから。

「早くしないさいよ〈竜帝〉! もうもたない……!」

「しっかりとよね、〈グングニル〉パイセン……!」

「あんた! もうちよつと先輩に対して敬意を……今、〈グングニル〉って言った!? ねえ、言ったわよね——!」

「この状況でなに喜んでんのよ馬鹿じゃないのバーカ!」

「二人とも、喧嘩^{けんか}してる場合じゃないですよおお……っ!」

拮抗状態の中、三方からの同時攻撃で身動きが取れなくなったティラノ型が何かに気付く。

「——来る!」

「……っ!」

「巻き込んだら祟^{たた}ってやるんだからね……!」

上空から——というにはだいたい低い、約四十五度の角度で撃ち込まれた高エネルギーによる砲撃がティラノ型を直撃した。

荷電粒子砲だ。



「やったぞ!」

ビル群の谷間を見下ろせる場所^{スポット}から、三人の〈機獣少女〉の奮戦を見守っていたアイナ・ボーグマンは、思わず拳^{こぶし}を握り込んでいた。

「……ですわね」

荷電粒子砲を撃ち終わり、MBジャケットの冷却装置がフル稼働中のルイゼ・ルンシュテッドも、安堵の息を吐いた。どちらかと言えば、砲撃の成功より、足止めをする三人を巻き込まずに済んだ事の方が大きかったが。

「問題はないか？」

「ええ。出力が上がった分、冷却やエネルギー効率も上がっているようですわね」

アイナとルイゼのMBデバイスは、共に珍しい共鳴増幅機能を持っていたが、どちらも《ヒナミ総力戦》でMBコアの半分を失った。そこで稀代の技術者であるロゼット・コダールにより、MBコアの片割れを失ったそれぞれのMBデバイスで共鳴増幅機能が働くように調整を施された。距離が離れてしまうと効果がないため、実質二人で一人という扱いにはなるが、ならば二人分以上の働きをすればいい。むしろ、単純な戦力で言えば、並の《機獣少女》が十人がかりでも今の二人には叶わないだろう。

「改めてロゼットに感謝だな」

「……正直、ワタクシは少しだけ彼女を恨んでいます。もう《機獣少女》として戦えなければ、アナタを戦場で失わずに済む」

ルイゼのMBデバイス《ジービー》と、アイナの《ビィエル》には、機獣だった頃の因縁がある。二機は宿敵で、最後は共闘して共通の敵に勝利したが、その際に《ビィエル》は自らを犠牲にした。

アイナは強い。だが何時か、彼女は機獣だった頃の《ビィエル》と同じように、ルイゼを残して散ってしまうのではないか。

ルイゼはずっとその不安が拭えなかった。

「この場で言うような事ではありませんでしたわね」

「まったくだ。心配性が過ぎるぞ」

誤魔化すように苦笑を浮かべるルイゼに対し、アイナは嘆息気味にそう答えた。

「だいたいお前はいつも——ん？」

「——っ!？」

荷電粒子砲の直撃を受け、地に突っ伏すようにして停止していたティラノ型が息を吹き返した。様子を窺っていたのだろう。付近の三人が一ヶ所に集まった瞬間に身を起し、奇襲を仕掛けたのだ。体重と遠心力を乗せた尾の一撃は、三人をまとめてビルの外壁に叩きつけた。

「いかん!」

「アイナ! くっ……!」

飛び出したアイナを追う。嫌な胸騒ぎがする。

「こつちだ！」

アイナが、両手に一本ずつ持った金色の刀身をしたレーザー・ブレードの片方を投擲する。見た目に差異はないが、MBコアを収納していない方だ。注意を此方に向けさせるための牽制のつもりだったのだろうが、ティラノ型は右側面から展開した副腕で弾き、意に介さない。そのまま両足で強く地面を踏みしめ、口を大きく開くと、やがて口腔から紫色の輝きが生まれた。動けない三人を噛み砕くつもりかと思ったが、それにしては距離がある。だとすれば輝きの正体は――

(荷電粒子砲か、その類。しかも恐らく秒読み段階――)

アイナも同じ結論に至ったのだろう。彼女等にティラノ型を一瞬で怯ませるような手段はもうない。三人を救う方法があるとすれば――

「――〈ビィエレ〉！」

『ロケットブースター、点火』

先行したアイナが腰のロケットブースターで加速するのを見て、慌ててルイゼもホバー走行に移行し追いかける。

(離れてはいけないとあれほど……もう！)

アイナはティラノ型と三人の間に滑り込むと、一本となってしまったレーザー・ブレードを構え、防壁を展開する。普段であればまず使用する機会はないが、彼女のMBジャケットにはエネルギー・シールドが装備されている。それで防ぐつもりなのだろう。

「――つくー！」

「おおおお……ッ!!」

アイナに追いついた直後、視界が紫色の輝きに染まった。ティラノ型が口腔から発射したそれは、やはりルイゼが装備する荷電粒子砲と同様の光学兵器で、しかしその威力は比較にならない。アイナの背中越しに見えるエネルギーの奔流は彼女の眼前で拡散し、まるで構えたレーザー・ブレードで斬り裂いているようにも見える。実際には刀身に発生している振動を利用して、Eシールドの強度を上げているのだが。

「ルイゼ！ 三人は……!?」

正面を向いたまま、アイナが背中中で問いかける。表情が見えずとも、余裕がないのは口調から明らかだった。

相当強く叩きつけられたらしく、キリエとモカは痛みに呻き、リツに至っては意識がない。全員をすぐに退避させるのは不可能だろう。アイナと離れられない以上、ルイゼが三人を抱えて離脱する事も出来ない。

(ワタクシの荷電粒子砲で——)

駄目だ。一射目を撃った直後だし、そうでなかったとしても出力に差がありすぎて、相殺は不可能だろう。

(砲撃が止むのを待つしかありませんの……!?)

時間の流れが遅い。景色は眩く目まぐるしいのに、ルイゼにはひどくゆっくりに感じられる。

「……………」

「アイナ…………?!」

片膝を突き、それでも耐え続ける友人の背中を抱くようにして支える。

このまま耐えきったとして、それからどうする？ 後ろの三人と消耗したアイナを、ルイゼ一人で護れるのか？

消極的な思考に心が折れそうになった時——耳障りな轟音が消えた。

「……………」

恐る恐る眼を開く。世界は元の色彩を取り戻してこそいなかったが、紫の輝きに埋め尽くされる直前の、フィルターがかかったような紅い色に戻っていた。砲撃が止んだのだろうが、テイラノ型の姿が見えない。

「……………」

間近に見えるアイナの様子が妙だ。信じられない光景を目の当たりにしたような顔で、呆然と無言で何かを見上げている。その視線の先を追い、ルイゼもまた、絶句した。

先ほどまで猛威を振るっていた機獣は、いつの間にか現れていた(ルイン)の巨大な腕で掴み上げられていた。嫌がる小動物のように四肢をばたつかせ、しかし何の抵抗にもならない。

——馬鹿な！ 我は神であるぞおおおおおおおおおおおおおおお……!?

テイラノ型の機獣は——喰われた。

その際、独裁者の末路を思わせる哀れな男の悲鳴が聞こえた気がした。



「そうきたか……」

〈ヤミヒメ〉——少女でなく機獣の方だ——の操縦席で、搭乗者のアヤカ・シユバイツァ

「は嫌悪感を隠そうともせず、『骨』を思わせるティラノサウルス型機獣^{がた}の最期を見た。捕食の目的はコアを取り込む事だと思われませう」

「でしようね」

後部座席の紅桜^{べにお}の淡々とした声に、アヤカも淡々と返す。

「ルイン」から脱出したツバキとやみひめを援護しようとしたが、どうしても機獣の装備では二人を巻き込んでしまう。ならばサクヤヒメでなく、移動を開始した「ルイン」を追撃しようとしたのだが、その矢先に異変は起きた。

ちなみに喰^くわれたティラノ型は、オオミヤ・シテイ突入時に交戦した赤い機獣に似ていたが、^{カラーリング}色^{ディテール}や細部はまるで別物だったため、確実に別の個体だろう。

「紅桜、状況次第でMBデバイスを使うから、その時は「ヤミヒメ」をよろしく」
「了解しました」



『食べる』という生きる上で当たり前の行為。

しかし昨今、加工され『食材』として売られている肉や魚に対し、少し前まで生きていたという認識を持つ者は皆無だろう。だから自分達の行為は柵^{かざり}に上げ、自然の肉食獣が獲物を襲う光景に対し嫌悪感を持つ。それは自分達が、本質的に『狩る側』でなく『狩られる側』だと、無意識に知っているからだろう。身ひとつで自然に放り込まれば、人間ほど種として弱い生き物は存在しないからだ。

「う、あ……」

目の前の光景に上手く言葉が出ない。

やみひめとツバキは連携してサクヤヒメを突破しようとしたが、そんな生易しい相手でない事は承知していた。だからまずサクヤヒメから無力化すべく全力で挑んでいたのだが、その間に事は起こった。

「……………」

そうそう取り乱す事はないツバキですら、その光景に複雑な表情を浮かべている。

『食べる』という、極めて当たり前^{プリミティブ}で原始的な行為は、実際にはこんなにも恐怖を喚起させるものか。

立ちほだかるサクヤヒメの後方で、『骨』を思わせるティラノサウルス型の機獣が、「ルイン」に軽々と掴^{つか}み上げられ——喰^くわれた。

丸呑み出来そうな巨大な口を開き、ティラノ型の胴体^{くわ}を銜^{くわ}え引き千切る様は、『捕食』

と言ひ換えた方が相応しいかもしれない。

「そんなにも恐ろしいか？ 生物として当たり前の事であろう？」

やみひめとツバキの反応を見て、不思議そうに顔を傾けるサクヤヒメ。彼女はほんの数日前まで〈ステインガー〉と呼ばれる機獣だった。しかも強大な力を持つ古代種であれば、捕食する側だったはず。今は人間の姿であっても、二人の抱いている感情を理解するのは難しいだろう。

「——ねえ、もうやめようよ！ 言葉が通じるのに、こんなのおかしいよ！ 悲しいよ……っ!？」

「やみひめさん……」

ツバキは何か言いかけて、喉元まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「前にも申したぞ。言葉が通じるからといって、話し合いで解決など出来ぬと。互いの利害が一致せぬのなら、残る手段はひとつしなからう？」

国家間なら戦争。そうでなければ、どちらかが不利な条件を呑むしかないが、どちらであつても遺恨は残る。

「ハイデマリーさんがあの中に囚われていると判つても、貴女の目的は変わらないんですね？」

「そうじゃ」

ツバキの確認に近い問いに答えると、サクヤヒメはやみひめに向けて言葉が続けた。

「感謝するぞ。己のおかげで混濁していた記憶が明確になり、人間を滅ぼさねばならぬ理由を思い出せたのじゃからな」

ツバキも感じたという波動の事だろう。自覚はないが、その現象の原因はやはり、やみひめにあるらしい。

「人間とは不条理な生き物よの。全員が幸せになる事は絶対に出来ないよう宿命つけられておる。呪いと言つてもよい」

幸せとは相対的なものでしかない。幸せでない状態との比較が出来てこそ感じられる。すべての人間が幸せになった世界に不幸せはなく、それはつまり幸せも存在しないのと同じだ。争いがなくならないのも、差別がなくならないのも、人間がそういう生き物だからだ。

サクヤヒメの言う通り、人間とは不条理にすぎる。

「そんな不条理から救つてやろうというのじゃ。滅び、終わりを迎えれば、その苦しみから解放される。皆、平等にな」

皮肉たつぷりにサクヤヒメは続ける。

「人間はこの言葉が好きだそうじゃな——『平等』。どれだけ本気で口にしておるか知らぬが、吐き気がする」

文字通り吐き捨てるように言い、サクヤヒメは無言で此方を見つめる。
 答えを待っている。

「貴女の言っている事は正しいのかもしれない。賛同する人だっていると思います。だからって、貴女の勝手で滅ぼしていい理由にはなりません！」

「難しい事は判らないけど、私は滅ぼされるのは嫌だよ。つらかったり、苦しんでる人達には悪いけど……私は生きたい！」

ハイデマリーの記憶を見て、サクヤヒメの話も聞いた後だと、ひどく自分勝手な考えだと判る。

結局、人間は自分の幸せを最優先して、他人の不幸には目を瞑って生きていくしかないのだろうか。

だとすれば本当に不条理だ。

「振り出しに戻ったの。じゃが、時間潰しにはちようどよか——」

嘆息し、しかしサクヤヒメの言葉は半ばで途切れた。テイラノ型を捕食し、何かを待つようにじっとしていた（ヘルイン）が動き出し、自分の背後に迫ったのには気付いていたはずだ。だが次の行動は彼女も予測していなかったのだろう。

和装に包まれたサクヤヒメの華奢な身体は、（ヘルイン）の巨大な爪によって背中から貫かれていた。



まともな人間であれば即死しているような風穴を身体に空けられ、しかしそれでもサクヤヒメの命の灯は消えていなかった。

「……まさかお主に助けられるとはの。恩は売っておくのもじゃ」

何処ぞのベッドに横たわったまま、傍らで自分を見下ろす娘に言う。表情を覆い隠す黒い面は力を与えた際の契約の証だが、彼女には自由意思を奪う処置はしていない。

ただ記憶を取り戻してやっただけ。ほんの気まぐれのつもりだったが、何が幸いするか判らないものだ。

「恩着せがましい言い方に聞こえるわね。まあ、感謝はしているわ。あなたのおかげで兄さんの事を思い出せし、本当の意味で再会出来た」

「だから妾を助けたと?」

そう。誰も動けない中、この娘が（ルイン）を攻撃し、怯んだ一瞬でサクヤヒメを助けた。無理矢理、深々と刺さった爪から引き抜かれた際の痛みは筆舌に尽くしがたかったが。「見捨てるのも寝覚めが悪いから。ただでさえ低血圧なのよ、私」

面パイザーの奥に薄うつすらと見える表情は、口調と同じくやはり淡々としているが、以前と比べいくらか雰囲気柔らかくなったように感じるのは、兄とやらと再会出来たためだろうか。

「然さよう様か。——時に、名前を聞いておらなんだったな」

「今更ね。というか、人間に興味なんてないと思ってたわ」

「……そうでもない。少なくとも一人、大事な者がおる」

ハイデマリー・I・エイミス。

彼女だけはなんとしても——

「カナコよ。カナコ・T・シングウジ。……今はたちばな橘 カナコだけど——」

何か思うところがあるのか、後半のカナコは妙にもじもじしているように感じた。

「——ねえ、適当に色々持ってきたけど、人間の薬とか効くの？」

「パイセン、病院ではお静かに」

「はあ!? 誰にももの言って——!」

「ぐ、（グングニル）さん。傷に障りますよ……っ」

「……ま、まあ私は後輩の意見に耳を傾げるだけの度量を持ち合わせているけど」

「ちよろ——」

「なんですって!？」

入ってきた三人の会話を聞く限り、どうやら此処ここは病院らしい。なるほど、怪我けが人を運ぶなら道理だろう。

「騒がしいの。此処は病院なのじゃろ?」

「——ひいっ!？」

意識が戻ったサクヤヒメに気付くなり、騒がしかった娘の表情が引きつった。残り二人も明らかに警戒している。彼女等らにした仕打ちを思えば当然か。

「ありがとう。処置は私がするから、あとは任せてくれていいわ」

カナコの言葉に顔を見合わせると、三人は持ってきたカゴを彼女に渡し、無言で出口へ向かう。

すると——

「——あの! リツ先輩を助けてくれて、ありがとうございました……!」

もつとも小さな娘が振り返り、緊張を滲にじませた声で言うのと、隣の娘がやや視線は逸そらし

ながらも、ぺこりと頭を下げた。

(律儀りちぎな事だ。願ねがいにつけこまれ、いいように使われたというのに)

小さな娘の願ねがいは、自分も重傷だというのに、隣の娘を救ってくれた。結果、手駒てこまにするため小さな娘も治療したが。

「……私も一応、感謝してやるわ。命を救われたのは確かだから……でも、その後の仕打ちは一生涯忘れないから！」

思えば、この時代に目覚めて最初に接触したのが、この騒がしい娘だった。地上から落下し、瀕死ひんしの状態だったため取引を持ちかけた。主に情報収集のため力を分け与え、かなり酷使したはずだ。やみひめの力で分断しなければ廃人となり、今頃は死んでいただろう。

「人間の身には余る強大な力を存分に振るい、さぞ楽しめたであろう？」

「っ！……この、悪魔め——！」

凶星を突かれた部分もあったのだろう。騒がしい娘は気丈に振舞ってはいたが、捨て台詞ぜりふを吐く際、目尻に光るものが見えた。

「意地が悪いわね」

「曰いわく、悪魔じやからの」

三人が退室し、束の間つかの静寂が訪れる。

「治療は必要？」

「不要じゃ。すでに自己修復が働いておる、効果はなからうよ」

シートに隠れて見えないが、胸から腹にかけて違和感がある。痛覚を遮断しているため痛みはないが、見ない方が精神衛生上いいに決まっている。

「そう」

「どれほど経たった？」

「あなたが無様に刺されてからなら、せいぜい三十分ってところね」

「ならば〈ハイロウ〉はすでに衛星軌道に到達しているはずじゃ」

カナコの皮肉を聞き流し、サクヤヒメは言った。

「〈ハイロウ〉って、『輪リンゲ』の事？ そう。でも、〈ルイン〉も今は荷電粒子砲を他所よそに向かって撃つ余裕はないでしょうね」

「戦っておるのか」

「ええ。必死でね」

「なるほどの。お主は監視という訳じゃ」

それがカナコが戦闘用の戦装束を展開している理由か。

「おかげで面フェイスが鬱陶うつとろしくて仕方ないわ」

外^{はず}そうとして見せるが出来ない。どうやらカナコは、やみひめの分断する力を知らないらしい。

「——どんな気分なのかしらね。自分のために、誰かが人間を滅ぼそうとするのって」
ハイデマリーの事を言っているのだろう。カナコも波動の影響を受けて知っているという事か。

「もし兄さんが、私のために世界を敵に回して戦ってくれたりしたら——とても嬉しいけど、申し訳ないとも思うわ」

カナコが俯^{うつむ}き、光の反射で、面^{バイザー}の奥の表情が完全に隠れる。

「ツバキに聞いたの。私がいなくなつてからも、兄さんは私の事を探してくれてたつて。とても嬉しかったけど、同時に申し訳なくもなつたわ。もういない私のために、兄さんを苦しめていた気がして……」

カナコは転移によつて別の星からゼーナに跳^とばされた。それを知らず、妹を探し続ける事は、その兄には不憫^{ふびん}だろう。

「……ハイデマリーもそうじゃと言いたいのか？」

人間を滅ぼそうとしているサクヤヒメに、負い目を感じている——と。

「そうは言わないわ。私はハイデマリーじゃないもの。ひよつとしたら、是非とも人間を滅ぼしてくれて応援してるかも」

それはない——と思う。自分の境遇^{うまれ}を憂^{うれ}いてはいても、誰かを呪^{のろ}ったりはしない娘だ。

(それを理解していてなぜ、妾^{わらわ}は人間を滅ぼそうとした……?)

無言のカナコに見つめられながら、サクヤヒメは自問自答した。



立体駐車場に身を隠していたクラウ・P・ブラン達四人が(L・C・ファクトリー)に辿^{たど}り着き、指示^{あお}を仰^{あお}ぐべく所長のロゼットのいる地下施設に入ると、室内は重苦しい沈黙に包まれていた。

「……あの、ロゼット？」

「あ。おかえり、クラウ。バナラとアエラも、無事で良かった。ライカも、ちゃんと合流^{たご}出来^{でき}たんだね」

「ああ。出来る限りの修理と補給をしたんだけど、何かあったの？」

状況がよくないのだとしても、この空気は妙だ。ライカが代表して訊^{たず}ねると、今はアニスに代わつてロゼットの補佐をしているシオリが中央モニターを操作した。そこに映つて

いるのは〈ブレケース〉の大群で、映像は数ヶ所分が分割して表示されている。

「まだこんなに……」

「どの群れも移動しているようですが……」

アエラとバナラも啞然^{あぜん}としている。

「これは中央・西方・南方・北方の各大陸で撮影された動画。暗黒大陸は情報統制が厳しくて動画は見つからなかったけど、〈ブレケース〉の群れが移動してらって情報はたくさんネットに上がってる」

〈ステインガー〉とその幼体が発する生体磁場の影響でテレビやラジオが使えないため、現在、情報収集のほとんどはコンピュータ上のネットワークを介して行われている。

「そのすべてが、東方大陸を目指しているそうです——」

……………

ロゼットから結論を引き継いだシオリの言葉に、クラウド達もまた黙り込んだ。

話を聞く限り、モニターに映っている〈ブレケース〉の群れは氷山の一角に過ぎないの
だろう。この数倍、あるいは数十倍から数百倍の群れがこの国に向かっていている。

状況から考えて、最終的な目的地は此処——オオミヤ・シテイだろう。でなければ、今
このタイミングで群れが移動する説明がつかない。

〈ルイン〉と同じか、それ以上の危機が迫っていた。

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第四十三話をお届け致します。

宣言した通り、今月も掲載出来ました。しかも推敲が終わったのが十二日……別に早くないですね。

今回も前回と同じページ数で、大ボリュームとなりました。このペースでいけば年内に完結させられそうな気がします。毎月このペースは地獄ですが……。

良きところで謝辞を。

まずはいつもの紙白さんに感謝を。今回も娘さん達の出番は少ないですが、もはやロゼットなしで『ゾイヤミ』は成り立たないかもしれません。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。キャラが増え、大昔にまで話が広がってますが、ついてきてくださってますでしょうか？ ご意見・ご感想が、次回作に反映される可能性は大ですので、よろしければアンケートを送ってください。励みになります。

2020 / 8 / 12 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ソイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る